

銭形平次捕物控

江戸の夜光石

野村胡堂

青空文庫

「親分の前だが、江戸といふところは、面白いところですね」

松もまだ取れないのに、ガラツ八の八五郎はもう、江戸の新聞種ニユースを仕入れて来た様子です。長なんがい顎あごを撫で廻して、小鼻をふくらませて、満面の得意が、鼻の先にブラ下がつてゐる様子でした。

「面白いに違げえねえな、お互ひに江戸に生れて江戸に住んで、大てした退屈てえもせず、また年を一つ取つたぢやないか」

錢形平次は、近頃、暇でく仕様がなかつたのです。勝負事は大嫌ひ。細工や片付け事は生れながら不器用で、御上おかみの御用のない日は、小原庄助さん見たいに朝湯に入つて、酒の代りに番茶を呑んで、氣の減るほど煙草ばかり吸つてゐるのです。

たまには黄表紙きべうしを出したり、八五郎とヘボ碁ごも鬪ぶはせますが、何べんも何べんも讀んだ黄表紙が、夢中になるほど面白い筈はなく、八五郎と一局圍きよかこんでも、申分なく人間の甘い八五郎に、三番立て投げなどを喰はされては、親分の平次の沽券こけんに拘かはるだけの事です。

女房のお静も、取つて二十三になつた筈ですが、相變らず若々しくて健康で、一日一杯目立たないやうに、静かに働いてをります。神田明神下の家庭は、静謐せいひつそのものですが、八五郎が時々やつて來ては、頓狂な調子で事件の匂ひを持ち込み、錢形平次を、静から動に、隱者のやうな生活から、大波瀾大活躍の舞臺へと誘さそひ込むのです。

「第一、元日から大晦おほみそ日まで、お祭まつりや催もよほし事のない日はなく、何處かに火事があつて、何處かで喧嘩が始まつて」

「物騒なことを面白がるぢやないか」

「その上、女の子が綺麗で料理がうまい、氣に入らないのは、いつでもこちとらの懷中がパイパイだ」

「落おちがきまつてゐる。——話は、それつきりか」

「今のは枕を振つただけで、話はこれから始まるんですよ」

「フーム」

「山谷の聖天様、——むづかしく言へば歡喜くわんきてん天様、——降魔かうませう招福さうふく、歡喜自在ごりやくの御利益ごりやくがあるといふ、大てえした佛様だ」

八五郎の話には、珍らしく筋がありさうです。

「それが？」

「江戸の喉首、吉原への通ひ路、山谷堀へ緒牙船ちよきで入らうといふ左手に鎮座まします、江戸城から見るとこれが鬼門きもんに當る」

「そんなことはどうでも宜い」

「宜かありませんよ。鬼門除けがあつて、裏鬼門の未申ひつじきるになんにも無いといふのは變だ、——といふので、江戸に吉原を開いた、庄司しやうじ甚内の子孫、庄司三郎兵衛といふ大金持が、目黒のお不動様の近くに住んでゐるが、先祖の甚内様にあやかつて、目黒川のほとりに江戸一番の盛り場を押つ開かうと、先づ自分の屋敷の中に、歡喜天を勸進くわんじんし、この正月の十五日には、開眼供養かいげんくやうとかのお祭があるんださうで、嬉しいぢやありませんか」

「何んにも嬉しいことはないぢやないか、盛り場が増えるのは、女房共の悩みの種だ」

「へッ、女房共の悩みは嬉しいね」

八五郎はチラリとお靜の顔を見て、龜の子のやうに首を縮すくめました。

「たつたそれだけのことで、お前は江戸が面白くなつたといふのか」

「面白いぢやありませんか、歡喜天といふのは、象の頭で人間の身體わがふしんの和合神ですつて

ね。男體は^{おほあらがみ}大荒神で、女體は觀音様の化身、——その聖天様の像といふのは、^{てんちく}天竺傳
來の大した御本尊ですぜ」

「——」

「像は子供ほどの大きさで、木像に色をつけたものだが、男體、女體それ／＼の額に夜
光の球が^{たま}はめ込んである、これが大變だ」

「夜光の球なんて、日本にそんなものがあるのか」

「大層な光ださうですよ、^{あかり}灯を側へ持つて行くと眩しいほど、——男體の方のは梅の實ほ
どで火のやうに光り、女體の方は^{ぎんなん}銀杏の實ほどで青光りする。あつしは見たわけぢやな
いが、氣味が悪いほどだと言ひますよ」

「フーム」

「最初は、難破して^{さかひ}堺の浦に流れついた、異人の船が持つて來たもので、その船の繕ろひ
や、歸りの路用に困つて、他のいろ／＼の品物と一緒に、土地の商人に賣つたものだが、
あんまり値段が高いのと、夜なんか不氣味で傍へ置けないので、堺の商人が江戸まで持つ
て來て、三百兩で賣りに出た品だといふことです」

「三百兩は大した^{てえ}ことだな」

その頃の三百兩は、通用價值から言へば、今の三百萬圓以上になるでせう。

「堺さかひの商人はその聖天様の額の寶珠を、水すゐ晶しやうか何んかと思つて、五十兩か三十兩に値踏みしたこととせう。引取つた他の品は、思ひの外高く賣れたから、聖天様の像は百兩で宜いといふことになり、目黒の庄司三郎兵衛がそれを買ひ、さて見る人に見せて驚きました。この珠は水晶やギヤマンではない、これは夜光の珠と言つて一國一城にも替え難いものだと言はれて、庄司三郎兵衛も膽きもをつぶし、急に目黒川のほとり、自分の家の後ろに堂を建てて、江戸裏鬼門の聖天様として、祀まつることになつた——と斯こんなわけですよ」

それは八五郎が面白がるほどのことか、それとも、大袈裟おほげさに傳へられた、市井しせいの雑事の一つか、其處まではまだわかりませんが、兎も角も大きな事件の種らしい匂ひがするので、言ふ事もなく夜光の珠といふのは、今で言ふダイヤモンドで、梅干大のダイヤが何百カラツトあるか、一寸想像も出來ません。

二

正月十日、霜そうてん天てんに泡を吹いて、ガラツ八の八五郎、奔馬ほんばのやうに飛んで來たのです。

「さア、大變ツ」

「どうした、八。この寒空に大變な汗ぢやないか」

「目黒の聖天様の騒ぎで」

「火事か、喧嘩か」

「夜光の珠が盗まれたさうで、目黒から使ひの者が、飛んで來ましたよ」

なるほどさう言ふ八五郎の後ろに、二十五六の良い若い者が一人、八五郎の三倍も汗を掻いて、焼き立ての芋いものやうに湯氣を立てて居るのです。

「そいつは變つてゐるな、そんなものを盗つてどうするのだらう」

「落着いちやいけませんよ。そればかりぢやない、聖天像の夜光の珠も大したものと聞いたが、それより大事なものは、庄司様の御内儀ごないぎの眼の玉をくり抜かうとした奴があるさうで」
なるほどそれは容易ならぬことでした。平次は早速支度をして、神田から目黒まで、近からぬ道を急ぐことになりました。

目黒の庄司家へ着いたのは、やがて晝近い頃でした。祖先は曾かつての吉原の創始者で、浪人者ではあつたにしても、名だたる有徳人うとくじんで、金もあり、人望もあり、何代か土地に住み着いて、申分のない人柄ひとがらだつたのです。

平次と八五郎と、それを案内して來た下男の磯松いそまつが、三頭の驛馬かんばのやうに、彈みきつて驅け込むと、

「いや御苦勞々々々、錢形の親分も一緒に、それは有難い」

迎へに出た庄司三郎兵衛は、四五六の仁體、まことに穩かな人柄です。髮形も身みなり扮も町人には違ひありませんが、態度には浪人らしさが残つて、應接も立派ですが、不安な氣持が一擧手一投足にもこびり付いていかにも氣の毒です。

「飛んだことでしたね、御内儀が怪我をなすつたさうで」

「兎も角も、堂の中から、一應調べて下さい」

「では」

廣い庭をグルリと廻ると、北から西へ伸びた、深々とした林があり、その林の中ほどに、十尺四方ほどの嚴重な堂だうが建つてをります。まだ木の香か目出度いまゝ、扉とを締めきつて、グルリと柵さくを繞めぐらしてゐるのです。

柵を開き、拜殿の大海おほえびちやう老錠を抜くと、中には立派な壇だんが据ゑてあり、扉とびらを開くと、等身よりやや小さいと言ふ、歡喜天くわんきてんの像が安置してあるのです。

像はなか／＼に古く、木目も見えませんが、いづれも天竺てんぢくの名木で作つたものでせう、

色彩も剥落してまことに慘憺たる有様ですが、男女二體の彫像の内、男體の額に鏤めた夜光の珠は燦然として方丈の堂内を睨むのでした。

その凄まじい光に平次も八五郎も思はずハツト立竦みました。——が、兩體の佛像のうち、夜光の珠の残つてゐるのは男體の方だけ、女體の方の額は、寶玉をめぐり取られて、淺ましい穴が、額にポカリと開いて居るのも無氣味でした。

「この通りですよ、錢形の親分。——この夜光の珠は、日本に類がないばかりでなく、唐天竺から南蠻にも珍らしいもので、これを一つ賣れば、南蠻紅毛の國では、何千兩、いや、何萬兩にもなるといふことです。曲者はそれを知つて、堂に忍び込み、開眼供養の前に盗み取つて、唐天竺に持つて行くか、長崎平戸あたりの、異人に賣り飛ばすにきまつてをります」

庄司三郎兵衛は、心外らしく語るのです。

「この像を堺の町人に賣つたといふ、南蠻人の商人は、江戸へ追つかけて來るやうなことはなかつたでせうか」

平次は漸く冷靜に立ち還つて、その調べを始めました。梅の實や銀杏の實ほどの珠が、何千、何萬兩もするといふことは、ザラの小泥棒などにわかる筈ありません。

「それも考へられないことはありませんが、この佛像を賣つた南蠻の商人といふのは、どうも唯たゞの商人ではなくて、世界の海を荒し廻る、海賊か何んかで、堺奉行が調べを始めると、船の修理もそこへに逃げ出してしまつたやうです」

「これを江戸へ持込んだ、日本の商人は？」

「それは素姓が知れてをります、小傳馬町の加納屋かなふやに泊つて、上方かみがたと江戸の間を引つきりなしに歩いて居る。和泉屋いずみや皆治と言ふ人で、歡喜天ひたひの額の珠が、大した値打のものだと聞いたらしく、その後賣値の倍で買ひ戻し度いと再三の掛け合ひでした。私は申す迄もなくお断りいたしました」

「ところで——この小さい方の珠を盗られた時刻は？」

「昨夜ゆうべの夕方から、今朝の夜明けまでの間——間違ひありません。昨夜は私が見廻つて、嚴重ちやうに錠ちやうをおろし、それから他所よそへ出かけました。今朝も私が一番先に見廻りました。入口ぐちうちに蟬せみが垂れて居るので、驚いて扉を開けると、この通り」

「錠前は？」

「間違ひなく昨日の夕方見廻つた時も、今朝検めた時も海老錠えりじやうがおりてをりましたよ」

「錠は？」

「私が持つてをります」

「無事だつたでせうな」

「間違ひありません」

庄司三郎兵衛は腰のあたりを搜つて見せるのです。

三

平次は何を考へたか、もう一度拜殿に戻つて、今度は蠟燭ろうそくを用意させ、それを片手にかゝげてサツト帳とばりを引きました。

「アツ」

寶石の威嚴や魅惑みわくに馴れない平次が、思はずたじろいだのも無理はありません。歡喜天の異様な象頭ざうとうの額ひたひに輝やく夜光の珠が、火の如く燃えて、魅入みいるやうに平次を睨むのです。

燃えるやうに——といふ言葉は、決して空々そら／＼しい形容ではありません。梅干大の夜光の珠は、宇宙創造うちゅうの神秘を籠めた、プロメトイスが盗んだ坩堝るつぽの焰のやうに、全くメラ

メラと燃えて居るのです。灯をかゝげて見る方寸のダイヤの威嚴は、どんなに凄まじいものか、泥棒も恐らくこれを見て膽を潰し、大きい方の佛像の額からもぎり取る氣力がなかつたのでせう。

平次は試みに手を加へて、歡喜天の大夜光の珠を押し見ました。象頭の像の額にハメ込んだ珠の根の臺座には、後で修繕ひでもしたらしい繼目があるのに、その細工が精巧を極め、珠は固く定着して、一寸したことでは取れさうもなく、その上、珠の發する光りが、冷い焰となつて、掌の指の間にメラメラと燃え、長くはこの冒險的な作業は續けられさうもありません。

諦めて柵の外に出ると、主人庄司三郎兵衛は、後ろの扉を嚴重に締め、さて二人を母屋に案内しました。

半分は百姓家造りですが、木口も立派、調度も何んとなく堂々として居り、江戸の町家のコセコセした造りばかり見て居る眼には、その大どかさに膽をつぶします。

板の間を二つ三つ過ぎると、奥には疊の部屋が唐紙で仕切つて幾つか連なり、その一番奥、南陽の當る八疊に、内儀のお照は外科の手當てを受けて居るのです。

「入らつしやいまし」

布團をハネのけて起き上がるのを、平次は兩手を舉げて、

「まア、そのまゝ、そのまゝ」

靜に押えて座につくのです。

田舎の内儀——それも中年過ぎの日焦けのした、大年増を豫想した平次も八五郎も、ハツと息を呑んだのも無理のないことでした。後で聽いたことですが、それは中年過ぎてから娶つた後添へで、年も精々二十四五、商賣人あがりらしい、蒼白い顔をした、少し劍のある、——が、美しい女です。

左の眼から頬へかけて顔半分の縹帶をして居るのが、鬱陶しく重々しい限りですが、それがこの中年増の内儀の美しさを、一層引立てると言つた、不思議な効果です。

が、平次も八五郎も、本當に眼を見張つたのは、内儀の布團の裾の方に、小じんまりと控へて居る、若い娘の可愛らしさでした。

「これが娘の幾と申すもので——」

と父親三郎兵衛に引き合せられて、恥かしさうに首を垂れましたが、頬の豊かな、唇の曲線の素晴らしい、まことに逸品的な美しさでした。いや、單なる美しさではなく、それは誰にでも好意を持つてゐるさうな、世にも目出度い存在だったので。

庄司三郎兵衛が耳打ちをすると、手當てをしてゐた外科が、道具を片付けて、

「もう大丈夫でございます。幸ひ眼の玉は外れたし、頬の疵も大したことではない、——刃物は左様、刀や鑿のやうなものではない、薄刃の剃刀かな、切出しかも知れないが眼にも肉にも骨にも、大したさはりはない」

さう言ひながら歸つて行くのです。

「お聞きの通りで、——曲者は最初から、家内の眼を潰すつもりで入つたわけではなく、佛像の額の大夜光の珠が取れなかつた口惜し紛れに、母屋へ忍び込んでこんな悪戯をしたのではあるまいか」

庄司三郎兵衛はさすがに行届いたことを言ふのです。

「もう少し、その時の様子を聴かして下さい。曲者はどうして入つて、どうして逃げたか、他に奪られたものはなかつたか——」

平次は押して訊くのです。

「昨夜——まだ宵の内だつたさうで、——私は相談事があつて、近所の知り合ひの家へ行つて居りました。——その留守を狙つて曲者が入り、置炬燵に凭れてウトウトして居る家内の眼を、後ろから抱きつくやうに突いて逃げ出したさうで——」

「私はうつかりしてをりました。行燈を消されたのも知らずに居たのでございます。左の眼を突かれて、ハツと眼を開くと、あたりは眞つ暗。何が何やらわからずに、大きい聲を出しますと、娘のお幾が、手燭てしよくを持つて飛んで来てくれました。その時はもう曲者は影も形もなく、何んで突いたか、得物も見付かりません。私は斯んな怨うらみを受けるわけはなし、唯もうあわてて居るところへ、主人が戻つて参りました」

内儀は眼の繻帶を氣にしながら、なか／＼雄辯に話してくれるのです。

「私が戻つてから、先づ何より手當てをさせましたが、もとより、こんな無法なことをされる覚えはなく、私も土地の繁昌のために骨を折つて居るだけで、人様から怨みなどを受ける筈もございません。ところが、今朝になつて、歡喜くわんきてん天様の額ひたひの珠たまが盗まれて居ることがわかり、その上家の中に手紙を投げ込んだものがあつたので、何も彼もわかりましたよ。これを御覽下さい」

三郎兵衛は立上がつて、手文庫てぶんこから一本の手紙を取出すのです。

四

手紙はありふれた半紙二枚を重ねたもので、八つ折にしたのを押し開くと、なか／＼の達筆で、斯う書いてあるのです。

「貴殿入手の歡喜天は、三國傳來の秘佛にして、俗人の私すべきものに無之、早速當方に引渡され度く此の段確と申入候。尤も佛體そのまゝ引渡すには不及、歡喜天の額上にはめ込みたる夜光の珠のみにて宜しく、それを抜き取りて、堂内の壇上に安置されたく候。若しこの申出に従はざるに於ては、貴殿の身寄の者の眼を一夜に一眼づつ奪ひ去るべく候。差當り次の眼は、——」

こゝで文句はプツリと切れて居るのです。

恐らく最後まで言はない方が、脅かしはぐつと手厳しく響くことを心得た爲でせう。手紙にはもとより署名もなく宛名ありませんが、今朝雨戸を開けた時、雨戸の隙間から投げ込んだらしく、白々と椽側にあつたといふのですから、曲者から主人三郎兵衛に當てたことは言ふまでもありません。

平次はそれをくり返して讀んで、椽側に立出でました。

庭も屋敷も廣いのですが、家族と言つては、主人夫婦と、——内儀のお輝には繼しい仲ですが、——娘のお幾、あとは下男の磯松、これは二十五の男盛り、庭掃きの爺やの五十

五になる與八、これは近在の百姓で、残るのは十九になる下女のお崎だけ、何んの疑はしいかどもありません。

「お隣りは？」

平次は低い生垣の先の大きい藁葺わらぶきの家を指しました。その家との間の庭は、道もないところに道をつけて、かなり踏み荒されて居るのです。

「御旗本御大身、波多野越前様の御隠居屋敷で」

「御家族は？」

「御隠居様のお朝様、もう六十以上の御年配で、あとは御女中と、下男ばかり」

「待つて下さい。お宅には坊ちゃんがあるらつしやる筈ですが——」

「——」

「眞新しい竹刀しなひがあり、弓矢があり、隣りのお部屋には、近頃刷すり立ての青表紙や、机の上には——」

「さすがは錢形の親分、——これは申上げたくないことですが、二十一になる彌三郎と申すせがれ件があります。總領の男の子には相違ないが、耻かしながら身持放埒はうちで、今は親類のところことに預けてあります。繼つしい中で家内ことも悉く心配をして居りますが——」

庄司三郎兵衛は内儀の顔を見い／＼斯う言ふのでした。

「それはお氣の毒で——」

平次も斯んなお座なりを言ふ外はありません。

「尤も、友達が悪かつた。伴は根が正直一途で、世の中を何んにも知らず、懐ろ子に育つてゐるところへ、私が若い後添へを迎へると、それをまた、他から嫉かす者があり——」

庄司三郎兵衛の言葉は、傍に居る内儀の思惑を兼ねて、いかにもしどろもどろです。が結局友達に遊佐の右太吉といふ、素姓のよくないのがあり、それが時々誘ひ出しては、伴の彌三郎に悪いことを教へるのだといふことになります。

「ところで御主人、この手紙の申し出をどうなさるつもりで？」

歡喜天の額の寶珠か、それとも活きた人間の眼玉かといふ恐ろしい脅迫に對して、主人の三郎兵衛はどれだけの覺悟を持つて居るか、それが聽き度かつたのです。

「歡喜天の珠は、何萬兩といふ寶で、盜賊などに脅かされて、おいそれとやれる品では御座いません。だが、家内はすっかり脅えてしまつて、この上の間違ひがあつてはいけな、命に替へる寶はないのだから、その夜光の珠とやらを、聖天様の額から抜き、盜賊の言ふ通りに渡してくれと斯う申します」

「錢形の親分に來て頂いたのは、——何うしたものか、それを決めて頂き度かつたのでございます」

庄司三郎兵衛は、この寒空に、額の冷汗を拭くのです。

「さア、あつしはこれでも町方の御用を承つて居ります。泥棒の言ひなりになつて、そんな大事な品を、悪者に渡してやれとは申し兼ねます」

「でも、親分」

内儀のお輝は、たまり兼ねたやうに、枕の上に顔をあげました。その繻帶で半分は隠れた顔には、容易ならぬ苦惱の色が、夕立雲の如くいろ／＼と動くのです。

「いや、これには深いわけがありさうです。暫らく八五郎を泊めて下されば、この男に見張らせますが」

「それは有難い、八五郎親分が見張つて下されば、精一杯御馳走をいたしますよ」

「この男は呑み過ぎる癖くせがありますから、日が暮れてからは、酒をやらないやうにお願いいたします」

平次がツケツケやるのを、八五郎はそつぽを向いて聽いてをりましたが、たまり兼ねた

様子で、

「親分の前めえだが、酒は呑んでも、呑まいでも——」

「馬鹿ツ」

やりかけたところを、平次に一喝かつされて、ペチヤンコになつてしまひました。

「それから、錢形の親分。この堂のまはりに、もう一重ひとへの頑丈な柵さくを繞めぐらし、村の若い衆を五六人頼んで、交替で一と晩見廻りさせようと思ひますが、何うでせう」

庄司三郎兵衛は、その手配はもう出来て居るやうな口吻くちぶりです。

「いや、それにも及ばないでせう。曲者はたつた一人で、吹けば飛ぶやうな非力な人間のやうですから」

「そうでせうか」

「それでは私は、御免かうむを蒙ります」

平次はこれだけにしてきり上げました。見送らうとする主人の三郎兵衛を押し止めて、目黒の往來へ出ると、後を追つて出た八五郎は、恐ろしく不足らしい顔で、

「ね、親分。親分の前めえだが——」

と言ひかけるのを、

「わかつたよ、八。晩酌ばんしやくを止められたのが不足なんだらう、だが、少し我慢しろよ、二日か三日のことだ。それから、聖天様の御堂なんかに氣を取られちやならねえよ、——大事なのは人間の眼の玉だ、——あの可愛らしい娘を見張つて居ろ」

平次はさう言ひすてて、神田の家へ歸るのです。

五

それから三日目の朝、目黒からの急の使ひで、平次は霜しもを踏んで行きました。

庄司三郎兵衛の家の近くまでやつて來ると、

「親分、濟みません」

遠くから顎あごを振りながら、八五郎が迎へてくれるのです。

「どうした八。昨夜ゆうべ、寢酒を呑み過ぎたらう」

「へエ、圖星で、御内儀の全快祝ひで、二本とつけて貰ひ——」

「それね、言はないこつちやない、神田に居たつて見通しだよ。お前めえが俺の顔を見るなり、いつも喰はせる『大變ツ』が飛び出さないから、餘つ程變だと思つたが」

「相濟みません」

八五郎はポリポリ小鬢こびんは搔かいて居るのです。

「で、何があつたんだ、聖天様の額ひたひの珠をやられたのか」

「それは無事でしたが、下女のお崎が、可哀想に、自分の部屋で眼玉をやられましたよ」

「あツ、だから言はないこつちやない」

「十九になつたばかり、色は黒いが、愛嬌あいけうもの者で、飛んだ良い娘こですが、可哀想に」

「で？」

「睡ねむつてゐるところをやられたのと、曲者もあわてた様子で、瞼まぶたを突つかれましたが、玉は

無事だつたさうで」

「危ないなア」

「不幸中の幸ひで、眇めっかち目めにならずに濟みましたが、得物は内儀の時の薄刃と違つて、簪かんざしのやうなもので突ついたさうです」

「可哀想に」

二人は足を早めて、庄司家に入りました。

「あ、錢形の親分、遠いところを、御苦勞様で——またやられましたよ」

主人の庄司三郎兵衛はいそくと出迎へました。

二人は兎も角も奥の部屋へ通されると、内儀のお輝は、

「入らつしやいませ」

主人の蔭から、物靜かに迎へます。

「飛んだことでしたね」

「こんなことが續くと、私はもう氣味が悪くて」

内儀はさう言つて怨めしさうに、夜光の珠に執しふぢやく着する、主人三郎兵衛の顔を見るの

です。

「でも、御内儀さんの疵きずはもう宜いやうで——」

「お蔭様でこの通り、少し跡は残りりましたが、それも次第に消えるだらうと、外科の先生が仰しやいます」

顔を擧げると、青々と刺つた左の眉尻まぶたからそ瞼を外れて、美しい頬までかけて、引つ搔いたやうな傷跡が残つて居ります。

蒼白く引緊つた顔——情熱よりは理智と意志を思はせる顔ですが、いかにも上品で清潔で、富める庄司三郎兵衛には、年齢の距へだたりを越えて相應ふさはしい内儀です。

平次と八五郎は、庄司夫妻に案内されて、お勝手に近い女中部屋に案内されました。

中に小綺麗な布團を敷いて寝かされてゐるのは、四日前の内儀と同じく、眼から頬へかけた繻帯をした下女のお崎で、それを看護して居るのは、娘のお幾、入つて來た四人の顔を見ると、驚いた籠の小鳥のやうに、狭い部屋の隅つこの方に小さくなります。

娘お幾の可愛らしさは非凡ひはんですが、下女のお崎も、健康さうな良い娘でした。

近在の百姓の娘ださうで、

「親許へもそう言つてやりましたが、まだ誰も來てくれません。尤も近在もつとと申しても、八王子近くなりますから」

内儀はそう言つて、そつとお崎の布團などを直してやるのです。

「どうだ、氣持は？ 傷はもう痛まないのか」

平次が訊くと、

「もう大したことはございません。——實はこれを申上げたものか、どうか、お嬢さんとも、相談しましたが——」

下女のお崎は枕から頭をあげて、妙に開き直つたことを言ふのです。

「どんなことか知らないが、何にか知つてゐることか、變つたことがあるなら、隠さずに

話してくれ」

平次はお崎の顔に近々と寄るのです。この娘の表情には、何やら腑ふに落ちない疑惑があるのです。

「——」

娘のお幾もお崎の言葉を誘さそふように、深々とうなづいて見せます。

「實は、皆さんのお話を聴き齧かじつて、私は矢も楯たてもたまらないほど心配になり、この次に曲者に狙ねらはれるのは、お嬢様に違ひないと思ひ、嫌がるお嬢様に無理を申し上げて、三晩前から、私はお嬢様と床を換かへて休みました」

「——」

四人の聴手は思わず顔を見合せました。

若い娘同士の同情と信頼は大人おとなの思ひ及ばない不思議なものがあるのです。

「二た晩、何事もなく過ぎました。もう大丈夫だらうと、昨夜はもとの通り、お嬢様はお嬢様のお部屋へ、私はこの私の床へ戻つて休みますと、夜半過ぎに、眼を突かれて、ハツと驚きましたが、——」

「灯あかりはなかつたのだな」

「眞つ暗な上に、氣味が悪いのと、痛いので、思はず聲を出しました」
 お崎は、その時の恐ろしさを思ひ出したものか、プツリと絶句ぜつくします。

平次はその視線を追つて、思はず顔を挙げました。西側の壁に格子を塗り込んだ、百姓家風の明り採り窓と、そこにチラリと物の影が射して、バタバタと人が逃げ去るのです。

窓は一尺四方ほどの極めて小さいもの、高くて嚴重で追つかける術すべもありません。

六

窓から射した人影、バタバタと逃げて行く足音、室の者は總立ちになりましたが、さすがに訓練の積んだ八五郎は、障子しやうじを二三枚ハネ飛ばして、椽側から飛び降りると、まっしぐらに曲者の跡を追つかけたのです。

これが江戸の町だつたら、八五郎ほどの韋駄天あだてんでも、一丁と行かないうちに、曲者の姿を見失つたことでせうが、有難いことに、その頃の目黒は百姓地だらけの田舎で、必死と逃げ出した曲者も、暫らくは身を隠す藪やぶもありません。

「野郎ツ、待ちやがれツ」

八五郎の聲は、目黒の野良のらに高鳴ります。この聲は、曲者の足を竦すくませるばかりでなく、八丁四方に居る人達の耳に響いて、思はぬ助力を呼び出す役にも立ちます。

時は眞晝、何も彼もが見通しです。逃げる曲者と、それを追ふ八五郎が、田圃たんぼの畦道あぜみちを走馬燈そうまつうのやうに馳けて行くのですが、不思議なことに、田圃で働いてゐる人も、道行く人も、八五郎に助勢しようといふ者は一人もなく、自分が悪いことでもしたやうに、顔を反そむけて除よけて通るのです。

「待たねえか、野郎ツ」

斯かうなると追ふ者の強さです。八五郎の體力が勝まさつて、次第に距離を縮めると、運悪く曲者は、物に躓つまづいてもんどり打ち、八五郎はまたそれに躓いて、引つくり返りましたが、直ぐ起き上がると、曲者を押へました。

「この野郎、飛んだ世話を焼かしやがる。見ろ、二人共汗みどろになつた上、畑の中につつまんだから、まるでドラ猫ぢやないか、良い新造つ子に見せられる面つらぢやねえぞ。畜生」息をはずませながら、斯こんなことを言ふ八五郎です。

曲者はまだ二十一二の若い男で、青白くて華奢きゃしゃですが、なか／＼の好い男で、近在の百姓せがれの倅せがれとも覺えません。

「さア、歩け」

襟えりがみ髪を取つて八五郎が引立てると、素直に首を垂たれて、トボトボと歩きますが、もとの庄司の家へ歸るのを、ひどく嫌がる様子です。

平次と、主人の庄司三郎兵衛は、それを椽側から見て居りました。曲者と八五郎が近づくとつれて、三郎兵衛はひどくソワソワするのです。

「御主人」

「ハイ」

平次はそれを顧みて靜かに聲を掛けました。

「あの曲者を、御主人は御存じでせうな」

「いえ、何」

「どうせわかることです。土地の人が顔を反そむけて通る様子や、八五郎がいくら怒鳴どなつても手傳つてくれない様子、——それよりも、この家へ戻るのを、ひどく嫌がる様子は、唯事ぢやありません」

「——」

「御總領の彌三郎とかを、身持放はうらつ埒で勘當なすつたといふことですが、あれが、彌三郎

さんぢやありませんか」

「恐れ入りました、親分」

平次の慧眼けいがんで睨まれては、一も二もなかつたのです。

「丁度良い、私は、彌三郎さんにも訊き度いことがあります。御主人も一緒に聖天堂へお出で下さい。歡喜くわんきてん天様がそれから、どうなつたかも拜み度い」

「ハイ」

主人三郎兵衛はそれに従ひました。内儀のお輝も、途中までそれについて來ましたが、何んとも言はない平次の氣持を測り兼ねたものか、途中から引つ返した様子、聖天様の入口の海老えび老ぢやう銃をあげたときは、平次と主人とたつた二人きりになつて居りました。

「親分、この野郎は動きませんよ。誰か手を貸して下さい、引摺ひきずつて行きますから」

八五郎は、嫌がる曲者を引摺りながら、堂の外で揉もんで居ります。

「手荒なことをするな、それは庄司家の若旦那の彌三郎さんだ。——自分の家を覗いただけ、泥棒呼ばわりをされるわけではないだらう」

「へエ、さうですかね」

八五郎も漸く曲者の襟髪を放しました。

放されて彌三郎は、最初の勢ひもなく、逃げ出さうとする様子もなく、首うな垂れて八五郎の蔭に隠れて居ります。

堂の中に入つて、正面の帳をかゝげると、歡喜天の男體の方の額の夜光石ダイヤが、隙間洩れる陽の光に、爛として燦かがやきます。

佛像は怪奇至極なものです、それだけに信者達から見れば、神通力廣こうだい大とも見えるのでせう。女體の佛像の額のゑぐられたのも、淺ましく目立ちますが、それよりも、男體の夜光石の威力は、それをカヴァして、四方を威壓ひあつする凄まじさを持つて居るのです。

「御主人、若旦那は、どんな不都合なことで勘當をされました」

平次は改めて訊ねました。

「それを言はなきやならないのでせうか」

庄司三郎兵衛、妙にモチモチして居ります。

「何萬兩とやらの夜光石を獲とるために、いや、多勢の——それも若い女の人の、夜光石よりも貴い眼玉の安泰のために、それは是非聽いて置かなきやなりません」

平次は妙なことを——だが、退のつびき引させずに言ひ出すのです。

七

「放埒ほうらつにもいろ／＼ありますが、金を費つたとか、女遊びをしたとか」

平次は誘ひを入れました。

「いや、そんなことはありません。伴は、身持ちの良過ぎる方で」

「喧嘩げんかや、博奕ばくちをやりさうな柄でもなし、あつしにも見當はつきませんが――」

「――」

平次はグイグイと突つ込みますが、主人庄司三郎兵衛は、モゾモゾして、容易に打ちあけさうもありません。

「それぢや、若旦那に訊くが、あの小窓から何を覗いて居たんです」

「荒壁あらかべにハメ込んだ、小さい小窓、百姓家の万年床の寢部屋にはよくある圖ですが、高くて小さくて、明り取り以外には役に立ちさうもありません。若旦那の彌三郎は、踏み臺をしてその窓から覗いてゐるところを、眼の早い平次に發見されたのです。

「何んでもありません。家に何んか、騒さわぎがあつたと聽いて、ツイ覗のぞく氣になりました」
彌三郎は漸ようやく口を開くのでした。

「こんな小さい窓から覗いたところで、家中見れるわけでもあるまいが」

平次は横槍を入れました。

「でも、お崎が怪我をしたといふ噂でしたから」

「お崎が怪我をしやうと、どうしやうと、お前の知ったことぢやないだらう」

主人の庄司三郎兵衛は、始めて伴の彌三郎に口をききました。それも、ひどく激しい口調で――。

「御主人、私にも大抵のことはわかりましたよ」

平次はいきなり妙なことを言ふのです。新しい堂の椽は、狭くはあるが清潔で、歡喜天に見張られながら、調べを進めるのも、なか／＼に變つた氣持です。

「？」

三郎兵衛は、つく／＼伴彌三郎のみすぼらしさを眺めながら、黙つて平次の話を促しました。

「若旦那が、下女のお崎と仲がよくなつたのが、勘當のもとぢやありませんか」

「――」

「いや、辯解なさることはない。道樂や勝負事の果てから、こんなに落ち果てた風になる

筈はない。好い男の若旦那を達引かうといふのが、男も女も事を缺かない筈。庄司家の身たてひ
上んしゃうが後ろ楯だてになつて居るから、少しもとを入れても損のしつこはない」

「？」

「二十歳代はたちの好い男が、この眞晝に、寢部屋の小窓から、下女の部屋を覗くのは——わか
つて居るぢやありませんか。若旦那は下女のお崎の身體を案じて、そんな恥かしいことを
なすつたんだ。ね、若旦那、そうでせう。——安心なさるが宜い、お崎かんざしは簪かんざしか何んかで眼
を突かれたけれど、曲者は餘つ程あわてたと見えて、上うはまぶた 瞼まぶたを怪我しただけ、眼には障さしは
りはない」

「有難うございます。親分、それを聽いて私も安心いたしました」

若旦那の彌三郎は、それが餘つほど嬉しかつたらしく、心から平次にお辭儀をするので
す。

「仕様がないうだ。お前はもう歸れ、好きなどころへ、とつとどうせろ」

三郎兵衛は伴の屈辱くつじよくてき的な態度がひどく氣になるらしく、平次の思惑をかまはずに叱
り飛ばすのです。

「待つて下さい、御主人。若旦那には、まだ、あつしが用事があります」

「ね、若旦那、打ちあけて言つて下さい。これは大事の事だ。人間の眼玉幾つにも係はる上に、何萬兩といふ夜光石ダイヤにもかゝります」

「若旦那は、あのお崎とか言ふ娘と、何にか約束をなすつたことでせう、——末は夫婦とか何んとか、よくあることで、——それはあの娘は、飛んだ良い娘ぢやありませんか」

水仕事などに忙しくて、顔容かほかたちをつくろふ隙ひまもないらしく、いかにも生れた生地きぢのまゝで、それに白粉も紅も知らぬ肌は小麦色を通り越して、赤黒い方に近く、いかにも見すばらしい娘です。その清潔さと、生無垢きむくな純情らしさは非凡です。

「そんなに、油を掛けないで下さいよ。あれは、下女に雇やとつた水呑百姓の娘だし、それに、血統ちすぢも良くありません。伴の嫁などと、飛んでもないことで、——年季が明けさへすれば、この三月には、親許に返します」

三郎兵衛は、以ての外の氣色もつでした。大家の伴の嫁に、水呑み百姓の娘の、下女あがりなどとは、當時の常識では考へられない釣合ひです。

「これは外の話ですがね、御主人」

「ハイハイ」

主人はこみあげる怒りを紛まぎらして應へました。

「御先祖の庄司甚内様は、江戸の吉原といふ、日本一の盛り場を開きましたな」

「へえ、それはもう、隠れもないことで」

三郎兵衛は自慢らしくうなづくのです。

「若旦那が、女遊びに身を打込むとか、花魁おいらんを請出うけだして、内儀にされたといふなら、御

主人は、あまりお小言も言はなかつたでせうね」

「それはもう、申す迄ありません。世間には例のないことではなく、一概がいに女郎と申す

と安くなりますが、花魁となると見識けんしきの高いもので御座います。わけても入り山形の二

つ星とか、晝ひる三さんの太夫とか申すのは、大名高家のお相手もいたします」

「――」

「現に私は、江戸の吉原の向うを張つて、お城の裏鬼門うらきもんに、目黒の盛り場を開かうとし

て居るくらゐで、せめて俵あをべうしが、青表紙の化物のやうになる代りに、物の道理や、遊びの

いきさつまで心得て、私の相談相手になつて欲しいと望んで居ります」

斯うまで歪ゆがめられた人生観は、平次の舌では、一朝一夕にどうすることも出来ません。

八

江戸の遊女崇拜の思想が、斯うまで根強く浸透して居たのです。その頃の文學も美術も音樂も、遊女崇拜から出發して、遊女崇拜の思想が、一般の人の心の中に、貧乏搖ぎもしない土臺を据ゑ、女遊びをしない者は、物のわからない奴であり、朴念仁ぼくねんじんであり、馬鹿でさへありました。

このわけのわからぬ主人に、思ひ知らせてやり度いのは腹一杯ですが、千萬言を費したところで、呑込める筈はなく、百人に許した唇も、どんな罪惡の因子いんしを持つて居るかも知れない血統ちようちも、花魁おいらんといふ名で淨化される、單純至極な考へやうには、平次も抗さかいやうはありません。

現にかう言ふ三郎兵衛の女房のお輝も、前身を洗へば、身體を買つた女に違ひはなく、夫の三郎兵衛が、腹の底から花魁おいらん崇拜で、倅をまでもその道徳で律りつしようとするのは、手のつけやうのないお宗旨見たいなものです。

平次は諦あきらめました。諦めると、引揚げる外はありませんが、このつぎに狙はれるのは、明かです。

それを知りながら、この遊女崇拜の愚かしきボスを見棄てるのは、日頃の平次の氣性では許されないことです。

「あれから、誰か、この聖天堂の中へ入りましたか」

氣を換へて平次は訊ねました。

「いや、誰も入らなかつた筈だ。私は毎日一度は覗くが、扉を開いて帳をあけて、歡喜天様の額の夜光の石が無事なことを確かめると、そのまゝもとの通りにして戻つて来る」

三郎兵衛の答へには、何んの疑念を挾む餘地もありません。

「鍵は？」

「一つしかありません。斯んな大事な場所は、代りの鍵を用意するのが本當ですが、そんな事をする、無くなす心配もあるわけで、私の流儀で、鍵は一つ、私の腰につけて居ります」

「まさか、鍵を抱いて寝るわけではないでせうな」

「夜分は、枕許に置きます」

庄司三郎兵衛は、自分の注意到落度があるなどとは、夢にも思つてゐない様子です。

「ところが、御主人。この三日の間に、誰か堂内に入つて、いろ／＼の細工をしてゐるの

はどういふわけでせう」

「そんな筈はありません。鍵は私の腰に——」

「思ひ違ひといふことがあります。——御主人、お酒の方は」

平次は呑む眞似をして見せました。

「少しはやりませんが、前後不覺になるほど呑んだことはなく、それに私は目ぎとい方で、枕許に置いた鍵を盗まれて、知らずに居るなんてそんなことはありません」

「夜中に起きることがありますか」

「私も女房も、一二度は手洗に起きますが、それもお互ひにわかるわけで、そつと相手に知らさずに起き出すなどといふことは考へられません」

「——」

三郎兵衛は確しかと言ひ切ります。内儀のお輝さんに盗む見込みのない鍵を、外から入つた盗賊が、主人の枕許からそつと盗つて聖天堂を開け、又もとのところへ返して置くなどといふことは、全く考へられないことです。

「——その上、鍵から眼を離したことがなく、夜中に眼を覺しても、必ず鍵を確かに見定めます。この通り大きい札を、根付け代りに付けてありますから、無くなつたのを、氣が

つかずに居る筈ありません」

三郎兵衛は、腰をさぐつて、帯に挟はさんだ木の札を抜きました。三センチ幅に、長さはその二倍半もある、頑丈な杉の札で、札の先には、麻あさひも紐ひもで大きい聖天堂の海老錠の鍵が結んであるのです。

「それは、よくわかります。が、この疵きずをどう見ます、御主人」

平次は歡喜天の男體の方の額を指さしました。

「？」

「額にはめた夜光石の、はめ込んだ根のあたりは、ひどく荒されて、膠にかはぬりか塗ぬりか知らないが、珠を留めたものが、——この通り、粉のやうに床の上にこぼれて居ます」

「——」

「三日前には、斯んなことはなかつた。それから三日の間に、晝か夜か、兎も角も泥棒が忍び込んで、タガネか何んかで、夜光の珠をぎぐり取らうとした。珠はなか／＼よく附いて居る上、臺座にハメ込んであるので、容易よういには奪とれない」

「成るほど」

強情な三郎兵衛も、これは承認しないわけには参りません。

「曲者は中に居ります、油断しちやいけません。自棄やけになると、本當に人の眼を潰つぶし兼ねません——ついては、御主人に折入つての相談だが」

「?」

「身内の者で、力になる用心棒が一人欲しいと思ひませんか。この次に狙はれるのは、お嬢さんの眼でなきや、御主人の眼にきまつて居ます」

「そんな物騒なことを」

「いや、これは間違ひもないことです。この夕子の悪い曲者の尻尾をつかむまで、八五郎を此處へ泊めて置いちや下さいませんか。人間は少し甘口だが、先刻さつきも御覽の通り、力はありますよ」

「どうせあつしは甘口あまくちですよ。チエツ、面白くもねえ、目黒くんだりまで来て、馬鹿を吹ふい聴ちやうされりや世話アねえ」

「あれ、聴えたか、八。我慢しなよ、用心棒があんまり賢かしいとかわくと、曲者は用心して寄りつかねえ」

「有難い仕合せで」

「芝居だつてお前、馬鹿の振りして居るくらゐの人間は、皆んな好い男で智慧者だ」

「いちでうおほくらぎやう
一條大藏卿が聽いて呆れらア」

皆んなは、笑ひながら聖天堂の外に出ました。

主人は開放されたやうに母屋おもやに歸り、俵の彌三郎は、軽く默禮して何處かへ行かうとするのを平次は呼び止めました。

「ちよいと待つて下さいよ、彌三郎さん」

「ハイ、何んか御用で」

彌三郎はオドオドしながら立ち停ります。何んとしても見すばらしい風體です。

「餘計なことを聽くやうだが、暫らく身を寄せる親類か知合はありませんか」

庄司の一人息子といふ肩書を振り舞はせば、唯で食はせようとする人も、達引たてひかうといふ人も、箒はうきで掃くほどある筈です。それをしないのは、人が良いのか、強情なのか、平次

でも見當はつきません。

「最初のうちは、随分、世話をしてくれた人もありましたが、心掛けが悪くて勘當かんだうした俵を世話するなら、出入りを差しとめると文句を言はれて、親類も知己ちぎも手を引いてしまひました。今ではこの通り」

まことに尾羽おは打ち枯らした姿です。

「丁度宜い。仕事がなくて困るなら、暫らくの間、この平次に雇はれて、働いちやくれませんか」

「？」

「と言つても、若旦那を下つ引にするわけぢやない。——八五郎は母屋に泊めますから、若旦那は外に居て、夜つびて家の廻りを見張つて下さい。夜中に誰が家へ来るか、聖天堂へ忍んで入るか、それが判りさへすれば宜いので、曲者をつかまへて、取つ組合ひなんか、以ての外で、——若旦那一人で手が廻らなかつたら、友達とか何んとか、懇意なものの人くらゐはあるでせう」

「そりや、あります。遊佐の右太吉、評判はよくないが、そんな悪い人間ぢやございません」

「手代りに、その右太吉とやらを頼んで下さい。妹のお幾さんの眼の玉を助けようと思つたら、——あの眼の玉は、歡喜天の夜光石よりも大事ですよ。あんな正直で情け深く可愛らしい眼を、あつしも見たことはない」

「その通りですよ、親分」

八五郎は、何處からか合槌を打ちます。

「それに、お崎の敵も討つてやり度い。眼は無事だったが、あの傷は生しやうが涯がい残るかも知れない」

「親分」

「わかつたよ、——お前さんの心持は、——花魁おいらんや女郎より、田舎娘の方が賤いやしいと思ふ父親があつちや、若旦那も骨が折れるだらう、辛抱なさるが宜い」

「——」

若旦那の彌三郎は、後に心を残して去るのです。もう寢部屋の小窓から、お崎の容態を覗く勢ひもありません。

九

「いや、もう、驚いたの、驚かねえの」

八五郎が報告に來たのは、それからまた四五日経つてからでした。

「お前の『大變』が、もう來さうな空そらあひ合だと思つたよ。目黒の庄司家はどうした」

平次は相變らず、明神下の長屋にとぐろを巻いて、煙草ばかり燻いぶして居ります。近頃は

早耳の八五郎が居ないので、ニユースが品切れでことの外天下太平です。

「金があるといふことは、恐ろしいことですね」

「貧乏人は兎角、そんなことを言ふよ」

「何しろ、目黒中の若い者を狩り集めて、辨當が出て酒が出て、お手當が五十文だ。悪くないでせう」

「俺に日雇ひやとひを稼かせげといふのか」

「あつしでもやり度くなりますよ。尤も辨當と酒はあつしにも差入れをしてくれるが、五十文の日當は、此方から斷わつた」

「當り前だ、女郎屋の亭主に手當てが貰ひ度かつたら、十手捕繩を返上して、牛太郎ぎゆうたらうにでもなれ」

「相濟みません。——何しろ、これだけのお手當てが出ると大變ですよ。庄司家には日が暮れると、毎晩少なくて二三十人、多いときは五十人もの用心棒が集まる」

「そこで、お前は浮び上がったといふわけか」

「御冗談で、あつしは、扇あふぎかなめの要のやうなもので、あつしが居るから、指圖が行届く」

「勝手にしやがれ、——その代りお仕着せの酒をお代り頂戴と來るのもお前だけだらう」

「へッ、見て居たんですか、親分は」

「それからどうした」

「娘のお幾も可愛いが、あの下女のお崎は飛んだ掘り出しです。眼は繻帯をして居るし、汚きたな作りの赤つ黒い娘だけれど、あんなもぎ立ての桃の實のやうな娘は、江戸の眞ん中ぢや見られません。若旦那の彌三郎が夢中になるわけ」

八五郎の報告はまた飛んでもない方へ脱線するのでした。

「馬鹿野郎、娘の品しなごた定めだに、お前を張らせたわけぢやないよ」

「でも、これを言はなきや、話の筋は通りませんよ。——集まつて来る若い者は、三十八五十人、毎晩酒が出て、あの様子の良い内儀が顔を出して愛あいけう嬌けうを振り撒まくから、皆んな弾はずみが付いて、競せり合つてやつて來まさら、石川五右衛門が夫婦づれで來たつて、聖天堂の側なんか寄りつけるものぢやありません」

「——」

「入費も大變だらうと思ふ。あれが何時まで續くことか、目黒近在ぢや、世直し様が來たやうに思つて居る」

「それつきりか」

「まだありますよ。娘のお幾は滅多めったに顔を出さないが、お崎は辨當や酒の世話で、毎晩出て來ます。可哀想に、伴の彌三郎は、自分の家ながら、大びらにも入れず、さうかと言つて、まさか日雇取ひよとりになつて呑み食ひも出來ず、人垣の影になつて、身を狭めて覗のぞいたり、合圖をしたり」

「――」

「つく／＼あつしは、女の子に掛り合ふものぢやないと思ひましたよ」

「それつきりか」

「これからが大變なんで、親分はせつかちだから叶かなはない」

「お前はまた氣が長過ぎるよ」

「今朝、――曲者からの二度目の手紙が、聖天様の堂の中に投り込んでありましたよ」

「矢つ張り來たのか」

「相手も、ひどく荒つぽくなりましたよ、――歡喜天の額ひたひの珠を渡さなきや、いよく家中の者の眼玉をくり抜いてやる。第一番に娘のお幾と内儀のお輝だ。何人で堅めたところで、そんなことに驚く拙者ではない、今日から三日と日を限る――凄すこいでせう」

「凄いのは相手だ、少しあせり始めたのだよ。それで主人の三郎兵衛は何んと言つてる」

「こんな脅かしに乗るものか、今晚から人數を倍にして、一人の手當てを百文に値上げする、——と」

「フ——ム」

「いよく世直しですね」

八五郎は呑氣なことを言ひますが、事件は益々深刻味を加へて來るのです。

「ところで、お前の話も、今度は總仕舞ひだらう」

「ところがもう一つ大事のが残つて居るんで」

「早くブチまけなよ、温めておくほどの話ぢやあるまい」

「こいつは、ブチまけるのが勿體ない程のタネなんで、——小傳馬町の加納屋に泊つて居るといふ、堺の町人 和泉屋皆吉といふ男が、目黒の庄司家を訪ねて來ましたよ」

「あの歡喜天を紅毛人から買つて、庄司家に賣込んだといふ？」

「その男で。何んでも、あの佛様は天竺のお寺から海賊が盗み出したものださうで、あとの掛合事がうるさくなり、長崎のオランダ領事の手に戻さなきやならないから、千兩で買ひ戻し度いといふ掛け合ひですよ」

「千兩と言つたか」

「ちよいとの間に三百兩が千兩になるんだから、もう少し温めて置けば、何千兩になるか知れないぢやありませんか」

「ところで、庄司家では承知したのか」

「小氣味よく斷わりましたよ。商人の取引はそんなものぢやない——とね。尤も歡喜天の女體の方は額の珠を抜かれて疵物きずものになつて居るから、庄司の主人にも弱身があるから、オイそれとはあの歡喜天をお目にかけれない」

「さう言つた含みふくもあるだらうな。ところで、話は段々こんがらがつて來たやうだ、俺も一度覗いて見るとしようか」

何日目かで、平次は目黒の庄司家も訪ねる氣になりました。

十

江戸の町から目黒村に入ると、その頃はまだ、別世界に足を踏込んだやうな心持でした。まだ菜なの花も咲かず蝶々も出ないのですが、路傍よもぎの蓬たぜりや田芹たぜりが芽ぐんで、森の蔭こたち、木立こたちの中に、眞珠色の春霞はるがすみが棚引いて、まだ陽炎かげろうふは燃えませんが、早春よそほの装よそほひは申し分も

ありません。

「へツ、へツ、たまらねえな」

八五郎がいきなり笑ひ出しながら、森の南の積藁つみわらの蔭を指さすのです。

「何が可笑しいんだ、八」

「あれを見て下さいな、兄ちゃんあんと姉ねえやの逢引きだ。泣いたり笑ったり」

さう言へば十間ばかり先、人目を忍んで若い男と若い娘が、手を取り合つて泣いてゐるではありませんか。

「ありや、お前、若旦那の彌三郎と、下女のお崎ぢやないか。様子がありさうだ、行つて見よう。だが、脅おどかしちやいけないぜ」

二人が近づくと、彌三郎は逃げ出さうとしましたが、相手を平次と見定めると、思ひ直してそれを迎へました。

「どうしましたえ、若旦那、お安くないぜ」

八五郎はもう、餘計な口をきくのです。

「お前は黙つて——どうかしましたか、若旦那」

「お崎はたうとう暇ひまを出されました」

さう言ふ彌三郎の様子は、いかにも絶望的です。

「それはまた、どうしたわけで」

「この間から、そんな話はありませんが、お崎はよく働いてくれるのと、妹のお幾が大の仲よしで、どうしても放すと旨はないので、両親も無理とも言へず、私だけを勘當しました。が、昨夜——いや、それはもう今朝になつてからでした」

「?」

「村の若い者達が、一と晩聖天堂を見張つて、夜が明けかけたから、もう宜からうと、ぞろ／＼歸つてしまつた後に、たつた一人、歸りそびれて残つた者があつたさうです、——四方もまだ薄暗いので、堂の横手で草鞋わらぢの紐ひもを結んでみると、一人の女が、聖天堂の扉を開けて中に忍び込んだのを見付け、それから大騒ぎになりました。まだ明けきらないのと、人数が少なかつたので、曲者は逃してしまひましたが、聖天堂の扉は開け放したまゝで、入口かんざしに簷かんざしが落ちて居たと申します」

「——」

「その簷は、お崎の大事にして居る、つまみ細工ざいくの簷で、——私が買つてやつた品で、お崎が大事にして居るんだと申します」

彌三郎はモチモチしながら極り悪さうに言ふのでした。

「聖天堂へ入つて、夜光の珠でも奪らうといふ泥棒が、大事な簪かんざしを挿さして行くだらうか」
平次もツイ口を挟はさみました。

「お崎もさう申したさうですが、言ひわけは通りません。今日中には請人うけにんを呼んで、小田原在の親のところに戻すと——」

「待つてくれ、俺が何んとか話してやらう。簪かんざしを挿さした泥棒は、あんまり聞いたこともない。それに、聖天堂の扉が開いて居たのは、大變なことだ」

平次はシクシク泣いてゐるお崎うながを促うながして、主人と一と談判始める氣でせう。全くこの娘は、夜光の珠泥棒にしては、あまりにも清純過ぎます。血色の良い頬、大きい眼、そして何も彼もが、自然のまゝの美しさです。

十一

平次と八五郎は、泣き濡ぬれてゐる下女のお崎うながを促うながして、母屋おもやに入りました。若旦那の彌三郎は、それと一緒に自分の家へ入りもならず、遠くの方から三人の後ろ姿を見送つて居

ります。

「お、錢形の親分、悪者から二度目の手紙をよこしましたよ」

主人の庄司三郎兵衛は、椽側からうら／＼と陽炎かげろふの立ちのぼる、田圃の景色を眺めて居りました。四十五六の分別盛りで、金にも智恵にも事缺かぬ、立派な江戸の旦那衆です。

「それは八五郎から聴きました。いよく曲者も、あせり出したと見えますね。歡喜天くわんきてんを、何處かへ移すやうなお話でもあるのですか」

平次の言葉は、すぐ原因の探求に飛躍するのです。

「さう言へば今日、堺さかひの商人の和泉屋の皆治みなぢといふ人が来る筈で、あの歡喜天をどうしても、千兩で譲ゆづれといふのです。千兩でいけなければ、千二百兩まで出さうと言ふのですが」

「あれが千二百兩、——大したことで」

「ところがいけません。堺の町人は、歡喜天は欲しいが、兩體とも揃つて、無疵むきずのまゝでなければいけない——と斯かう申します。御存じの通り女體の方は、額の夜光石をゑぐり取られて居ります。あれを見たら、堺の町人——和泉屋皆吉といふ人は、何んと申しますか」

庄司三郎兵衛の顔には、苦澁くしぶの色が隠すべくもありません。男女兩體揃つて、無疵のまゝでこそ、大した値打のものでせうが、一方の女體の額に大穴があいては、踏み倒されるに

決つて居ります。

「序ついでにもう一つ伺ひますが、下女のお崎を今日限り暇ひまをやるといふのは本當でせうか」
平次は話題を變えて、さり氣なくお崎のことに觸れて行きます。

「そのことですよ、親分。あの娘の簪かんざしが、聖天堂の入口に落ちてゐて、お堂の入口の海老錠錠が開いて居ると、外に疑ひを持つて行きやうはありません」

「お崎が曲者の仲間なら、大事にしてゐた、つまみ細工ざいくの簪などを挿さして、聖天堂へ入るでせうか」

「八五郎親分も、さう言つて居りました。が、このまゝお崎を許して置いては、家の者が承知しません」

家の者——といふと多勢らしく聴えますが、それは、内儀のお輝一人のことだつたかも知れません。

「一應は尤もですが、歡喜天の女體の額の夜光石を盗んだ曲者を縛るまでは、この屋敷から、一人も外へ出し度くないのですよ、——御主人」

平次は思ひも寄らぬことを言ふのです。

「すると、錢形の親分は、その曲者をお崎だと言はれるのか」

「飛んでもない。お崎は曲者ではない。が、お崎は何にか大事のことを知ってるに違ひないのでですよ」

「成程」

「下女であらうと下男であらうと、この家の者を一人も外へは出し度くない、——おわかりでせうな御主人」

平次の止めは効果的でした。斯う言はれると、押しきつて、下女のお崎を返すといふわけにも行きません。

「でも、錢形の親分。私は、あの娘と同じ屋根の下に住むのが、不氣味でなりません」

それは何時の間にやら、主人の後ろに來てちんまりと坐つた内儀のお輝でした。言葉に少し訛なまりがあつて、蒼白ほそおもてい細面は、もとの稼業が何んであらうと、何んもなく近寄り難い上品さがあります。

左の眼の上の傷は、もうすつかり癒なほつて、繃帶も解いてしまひましたが、傷跡は少し残つて、一種の惱ましい感じでした。

「それは大丈夫で、八五郎に見張らせてあります」

「——」

内儀のお輝の唇には、好意とも悪意ともわからぬほのかな微笑が浮びました。八五郎親分では、何ほどの役にも立つまいと言つた、からかい氣味の微笑とも取れるのです。現に當の八五郎は、平次の後ろの日向に腰をおろして、無心に鼻毛を抜いてゐるのです。

十二

晝少し過ぎになると、和泉屋皆吉といふ堺の町人が來ました。

「私が歡喜天様をお納めした、堺の皆吉でございます」

と取次がせると。主人庄司三郎兵衛は、平次にも頼んで、その立會の上に話を進めました。それに八五郎は椽側に待機し、内儀のお輝は茶を運んだり、菓子を持つて來たりするので、結局この談合は、五人立會の上で始められたものと同じことです。

「實は、私からお納めした、聖天様の御像は、やかましいことになりました。天竺のさる寺から、オランダの役人に頼んで、あの本尊様は、海賊の手で盗み出されたものだから、是非返して貰ひ度いと、強つての談判でございます。その代り唯とは申さない、金は千兩まで出す——いや千二百兩でも宜しいといふ申し出で——」

堺の商人皆吉の申し出は、寛大ではあるが、妙に嚴重さがありました。恐らく千二百兩か千五百兩、或は三千兩にもなる、うまい口錢が附いて居るのでせう。

「それは併し、妙な話ですが、私は江戸の商人の仲介でまともな品として買入れ、何百兩かの入費をかけて、あの御堂まで建てました。今更お堂を空つぽにして、天竺とやらへ返せるわけはございません」

庄司三郎兵衛もなか／＼に頑強らしく突つ張りました。

「では、申上げますが、御主人、驚いてはいけませんよ。あの歡喜天の額ひたひにハメ込んだ珠は、金剛石と申す夜光の珠で、たいした値打でございます。それを狙つて、長崎から大層な悪人が江戸へ入り込んだといふことでございます」

「脅かしちやいけません」

「いや、決して脅かしを申すわけではない。悪者は二人のやうに聽いて居りますが、いづれにしても、見込まれた以上は、どんな事をしても奪られるに決つて居ります。せめて御怪我のないうちに、私に御引渡し下されば、私は堺奉行の手を拜借して、オランダの役人に届け、八方無事に治まるやうにいたし度いと思ひますが」

堺の皆吉の話は、なか／＼筋が通りますが、この熱心さから見ると、いづれ、二千兩や

三千兩は手に入る仕事でせう。

「ところが、困ったことになりました」

主人三郎兵衛は、分ぶんべつ別らしい額に手を當てました。苦澁の色は蔽おほふべくもありません。
「困ったことと仰しやるのは？」

「申し上げませう、いづれは知れることです。——實は五六日前の晩、聖天様、男女兩體のうち、女體の方の額の夜光石を、盗まれてしまひました」

庄司三郎兵衛は、言ふべきことを言つてしまつたのです。

「それは大變なことで御座います。御主人、私は兎も角として、オランダの役人は何んと申しますか」

「錢形の親分にもお願ひして、いろ／＼搜して居りますが、かいくれ行方ゆくへがわからないばかりでなく、曲者は男體の夜光石——あの梅干ほどの大きい寶玉まで狙つて、いろ／＼と細工をするので、この通り村人を狩り集め、夜も晝も嚴重に見張つて居りますが」

庄司三郎兵衛は今更らしく辯解するのですが、額に沁み出した冷汗は隠しやうもありません。

「では、御主人、打ちあけて申しますが」

和泉屋皆吉は、何やら含みのあることを言ひだすのでした。主人も平次も、内儀も八五郎も、思はず聴き耳立てたことは言ふまでもありません。

「よく聴いて下さい——驚いてはいけませんよ」

「?」

「何を隠さう、あの聖しやうてん天様、男女兩體の二つの夜光石のうち、何千兩といふ値打のある、眞物ほんものの夜光石は、男體の額のだけで、女體の額にハメ込んである、銀杏ぎんなんほどの小さいのは、あれは偽物でございますよ」

「あツ」

これは實に、豫想もしなかつた大きな驚きでした。冷靜なのは、さう言つた和泉屋皆吉だけ、平次はさすがにとり亂みだしもしませんが、主人庄司三郎兵衛は申す迄もなく、内儀お輝の驚きやうも大變なものでした。

「それはまア、どうしたことぞ?」

主人三郎兵衛を差し置いて、あの美しく氣高くさへある内儀が、堺さかひの町人に詰め寄つたのは、たいしたことでした。

「詳くはしく申さないとわかりませんが、あの聖天様は、インドとやらの寺にある時も、一度

盗まれたことがあるさうで、間もなく役人の手で取戻しましたが、その時はもう、女體の歡喜天様の額の夜光石は抜かれて居たさうで、このまゝでは、信者の方にも相濟まないと、お寺でギヤマンに水銀を貼つた偽物を造り、女體の額の穴にハメ込んださうでございます。成程さう言はれて見ると、男女兩體の夜光石はまるつきり違います。光澤と言ひ、光りと言ひ、それから、女體の方は後から入れたので、直ぐ外れますが、男體の額の夜光石は、佛體に刻み込んだもので、漆を碎いたくらゐではなか／＼抜けません」

さう言へばその通りで、男體の額の夜光石は、幾度か曲者に狙はれ、タガネか鑿でゑぐり取らうとしても、容易に取れなかつたことは、皆んなよく知つて居ります。

だが、併しこの皆吉の打明け話は、大變なことでした。曲者の奪つた夜光石は、唯のギヤマンの偽物とわかると、事態はすつかり變り、庄司三郎兵衛も、一應は愁眉を開くことになるわけです。

十三

一應佛像を拜んで行き度い——といふ堺の町人皆吉の申し出を、主人庄司三郎兵衛は拒

み兼ねました。女體の額の小さい夜光石の紛失は、幾らか氣が樂になりましたが、男體の額の大きい夜光石の安否も一度は見定めて置く必要があつたのです。

五人の男女が、揃つて聖天堂の前に立つと、その邊に物好きらしくウロウロして居る夜番番の百姓達を、遠くの方へ追ひ退け、主人の庄司三郎兵衛は、腰に提げた、大きい鍵を、根付けの木の札ごと引抜いて、堂の正面に近づきました。

「今朝もこの扉が開いて居たので、直ぐ締めて置きましたが、中には異状がなかつたやうで——」

さう言ひながら、大一番の海老錠の穴に鍵を差し込みました。が、鍵は錠の中に入つたまゝ右にも左にも動かうとはしなかつたのです。

「どうしました、御主人」

「こんな筈はないのですが」

「鍵が違ひはしませんか」

平次はその手許を差覗きました。

「いや、そんな筈はない。私はこの鍵一つしか持つては居ないのだから——變なことがあるもので」

庄司三郎兵衛は尚ほもガチャガチャやつて居りますが、頑固な海老錠は開いてくれさうもないのです。

「ちよいと、私にやらして下さい」

平次は主人の手から、鍵を受取つて、念入りに廻して見ましたが、矢張り言ふことを聽いてくれず、大きな錠は、執しつこく沈黙を守り続けるのです。

「このまゝでは一と晩も過せない。いづれ後で大工の手を借りて、扉を外はずさせませう。その間和泉屋さんには、一杯差上げながら、お話を承るとしませう。錢形の親分も付き合つて下さい」

主人は出入りの大工を呼んで、扉の蝶てふつがひ番ばんを外すやうに申し付け、皆吉と平次と八五郎と、そして内儀も従へて母屋おむやに引揚げました。

「あの」

酒が始まつて、席が少しほぐれた頃、内儀は主人の三郎兵衛に囁ささやくのでした。

「ちよつと、鍵を拜借し度いと、棟とうりやう梁りやうが申しますが、爺やの與八に見張らせて置きますから」

「さうか、——扉の蝶てふつがひ番ばんをこはさずに濟むものなら、その方が宜いな」

三郎兵衛は腰を搜つて、堂の鍵を内儀に手渡しました。丈夫で眞黒な鐵の鍵に、まだ新しい木の札を附けたまゝ、麻糸を捻よつた紐で嚴重に吊つるしてあります。

内儀は椽側から顔を出して、爺やの與八を呼んでその鍵を渡し、そのまゝもとの座に戻りました。それからほんの煙草なら二三服と思はれる、短かい間、人々の雑談は、鍵のこなどを忘れて、世間話に花が咲きます。

「妙なことがありますよ。旦那様」

爺やの與八は庭口から顔を出しました。

「何うしたの爺やさん」

取次いだのは内儀のお輝でした。

「聖天様の御堂が開きました」

「扉をこはしたのか」

「いえ、この鍵が、利いたので。棟梁とつりやうが廻すと、何んのわけもなくクルリと廻つて、

あの錠前が開いてしまひました」

「そんな馬鹿なことが」

三郎兵衛は立ち上がつて居りました。反對に錢形平次は落着き拂つて、爺やの手から鍵

を受取ると、ためつすかしつ、それを眺めて掛ります。根付けの木の札の木目から、鍵の大きさ、重さ、それを吊つた麻紐の捻よりの具合まで。

「兎も角、行つて見よう」

四人はそれに従ひました。庭から廻つて、堂の扉へ。八文字に開いて錠前は抜いたまゝ、ブラ下がつて居りますが、それを眺めて居る棟梁は、

「何んでもなく開いてしまひました。何處も損じちやありません。まるで嘘うそ見たいで」と、酔つぱい顔をするのです。

堂の中へ入つて、正面の帳とばりをかゝげると、祭壇の上の歡喜天は、クワツと此方を睨み据ゑて居り、男體の額にハメ込んだ夜光石は、夜の灯で見る程ではないにしても、窓から射した眞晝の明りに、燦爛さんらんとして、百千の星をかけ並べたやうに光つて居るのです。

十四

和泉屋の皆吉は、念入りに歡喜天くわんきてんを調べて居りましたが、それが濟むと、

「では、このまゝで結構です。三日経てば長崎から金が着くことになつて居りますから、

四日目には間違ひもなくこの佛體を頂載に参ります」

自分の言ふだけのことを言ひ遺して、振りきるやうに庄司しやうじの家を立出でました。錢形平次は、何にか思ふことがあつたらしく、

「それではあつしも家へ歸りませう。八五郎を留め置きますから」
 拶挨もそこゝに飛び出してしまつたのです。

家を出て少し行くと、

「有難うございました。錢形親分さん」

呼びとめたのは、下女のお崎でした。いやお崎の後ろに、寄り添ふやうに立つてゐた、娘のお幾いくだつたかも知れません。

「?」

平次はその意味を測り兼ねて立ち停つたのです。一應の調べが済んで、和泉屋の皆吉と一緒に、これから歸らうとして居る時でした。

「お崎を引留めて下すつて、私は本當に嬉しいと思ひました」

今度は確かに娘のお幾です。邪念じゃねんとか作爲とかを、何處かへ忘れて來たやうに、いかにも可愛らしい娘です。こんなふくよかな娘は、無抵抗で無防禦で、惡魔の餌えには、最も

都合が良いのかも知れません。

健康で赤黒くて、純粹ではあるが、充分意志も強さうな下女のお崎くらに比べると、これはまさに、糝粉しんこ細工のお姫様のやうです。

「まあ、宜いあんべえでしたよ。これからも思案に餘ることがあつたら、八五郎に相談して下さい。暫らく此處へ泊めて置きますから、それから」

「さうして下さると、心丈夫ねえ」

「それから、もう一つ、當分の間、——枕まくらの方角はうかくを變へて休んで下さい」

「？」

「いつも南枕だつたら北枕に、東枕の癖があるなら、西枕にして」

「怖いワ、私」

「これは誰にも言つちやいけませんよ、——若旦那の彌三郎さんは、お家へ入られるやうに、私からお内儀さんに頼んで置きます」

少し先へ行つた、和泉屋の皆吉に聴えないやうに、平次は二人の娘むすめに囁くささやくのでした。

そして、小走りに皆吉に追ひつくと、相携あひたつさへて、江戸へと急ぐのです。皆吉は小傳

馬町の宿へ、平次は神田明神下へ。

道々、堺の商人、皆吉は言ふのです。

「ね、錢形の親分。あんなことを言つて宜いでせうか」

「構やしません。——とところで、三日経つたら、千二百兩の小判を、馬にでもつけて此處まで運んで来て下さい。庄司の御主人も、その氣になつたやうだから」

「それは心得て居ります。私も良い口錢になることですから、——が、あの女體の額の夜光石は惜しいことで」

「そのうちに、思ひも寄らぬところから出て來るでせう」

二人は田圃道にかゝりました。と出逢ひ頭に、森の中から出て來た男、ハツと面喰つた様子で、頬冠りのまゝ通り過ぎます。横顔だけしか見えませんが、二十五六の小意氣な男です。

「あれを御存じですか、錢形の親分」

皆吉は振り返りながら訊きました。

「顔だけは知つて居ますよ。遊佐の右太吉とか言ふ、厄介な男で、庄司の若旦那の彌三郎さんは昵懇にして居るやうだが、油斷のならない男です。——少し上方訛がありま
すが」

平次は近頃繁々と顔を合せるが、まだ口をきいたことのない、遊佐の右太吉のことを説明してやりました。

「あの男は私も存じて居ります。遊び人風には見えませんが、堺で紅毛人の通辭つうじ（通辯）をしてゐた男で、——油斷がなりません。あんな男が土地へ入り込んだら

和泉屋の皆吉は、振り返り振り返り妙に警戒的なことを言ふのでした。この時の同行は二人、八五郎は目黒に残されたことは言ふ迄ありません。

十五

「親分、目黒といふ國は、恐ろしく退屈ですね」

八五郎が、明神下の平次の家へ飛び込んで來たのは、それから二日目でした。

「あ、八か、何んだつて今頃來やがった」

平次は相變らず、閑でく仕様のないやうな顔をして、椽側に腹ん這ひになつたまゝ、庭に芽ぐんだ春を眺めて、煙草ばかり吸つて居たのです。

「御挨拶ですね、親分。あつしはまた、少し褒めて貰はうと思つて來ましたが」

「お前でも、褒められ度くなるのか。まあ宜い、其處に立つたまゝ話せ」

「家へも上げてくれないんですか、親分。——せめては、目黒から驅けて來た様子だから、お茶でも呑めとか何んとか」

「茶は品切れだよ、喉のどが渴かわくなら、水瓶みづがめへ首を突つ込め、——もう陽がかげつて來たぢやないか、目黒まで歸つたら暗くなるだらう。明日か今日だ、曲者は何をするかわからねえから、暗くなつたら、あの家を一刻もあけちやならねえ」

「驚いたね、どうも。あつしはまた、自分の身に引き比べて、親分もさぞ退屈だらうと、今夜の鱈どげうじ汁を喰ひ損ねるのを覺悟で、此處まで飛んで來ましたが」

「來るに及ぶものか、歡喜天様の女體むたひの額ひたひの珠が見付かつたんだらう」

「あツ、親分はどうしてそれを？」

「さう來なくちやならないように、車掛りの陣しを布しいてあるのさ。その夜光石を何處へやつた」

「主人の庄司三郎兵衛様が、自分の眼玉のやうに大事にして居ますよ。尤もつとも、あれがギヤマンの偽玉ぢや何んにもならねえが」

「誰が、そんな事を言つた、——あれは正真正銘の夜光石だよ。偽玉なんかでたまるもの

か」

「えッ、——だつて、堺さかひの商人の和泉皆吉が——」

「俺がさう言はせただけのことさ。カづくぢや、奪とり返せさうもないと思つたから」

「驚いたな、曲者もさう思ひ込んで、女體の額の偽玉は返すから、男體の眞物の夜光石をよこせ、今夜のうちにそれを渡さなきや、娘お幾を始め家中の者の眼玉をくり抜くと、偽にせの夜光石を包んだ手紙を、堂の中に放り込んでありましたよ」

「その大事な時、お前は脱け出して來たのか」

「親分の迎いにね。尤もつとも、それまでは退屈でしたよ、見張りが大事だといふので、あつしには酒も出してくれねえ。可愛らしい娘つ子の、お幾とお崎が、時々チラチラするけれど、若旦那の彌三郎が戻つてからは、内儀のお輝さんは、恐ろしく不機嫌で、あつしが挨拶しても、ニツコリともしねえ」

「贅ぜいたく澤だよ、お前は、それで話が濟んだら、直ぐ目黒へ戻つてくれ」

「あれ、お前さん、お茶を入れて上げて下さい。ちよいと、煎餅せんべいでも買つて來ますから」
お静はいそくと立上がるのです。

「放つて置いて下さいよ、姐さん。それよりもう一つ親分の耳に入れ度いことがあるんだ、

これは一向つまらないことだが」

「何がつまらないもんだ」

「遊佐ゆさの右太吉といふ野郎は、内儀とわけがありさうですよ。内儀が上方かみがたで勤めをして居た頃の客だつたさうで、——後を追驅けるやうに目黒に來て、ブラブラ様子を搜さがつてるうち、庄司の伴の彌三郎と懇意になり、彌三郎をけしかけちやいろくの事を企たくらんでるらしいが、彌三郎は懷ろ子のお人好しで、右太吉と無二の氣であるから世話アないでせう」

「よし、褒めてつかはずせ、八。いろんな事がわかつた、俺も後から行く。お前はひと足先へ引返してくれ、煎餅せんべいなんか、來年でも喰える」

「それぢや親分」

平次の意氣込みの激しさに驚いて、八五郎も煎餅を諦めました。

「女體むたひの額の夜光石のことは誰にも言ふな、それからお前は、遊佐の右太吉を搜し出して、本人に氣付かれないやう、一と晩見張るのだ。——但したゞ、餘計なちよつかいを出しちやならねえ、わかつたか」

「へエ」

八五郎をひと足先に、平次はそれに續きました。

十六

平次はそれから、小傳馬町の加納屋に、堺の商人、和泉屋皆吉いずみを訪ねて、最後の打ち合せをしたことは言ふまでもありません。

庄司の内儀お輝に逢ひ、遊佐の右太吉に逢つた、堺の皆吉は、二人の顔を見て記憶きおくを喚よび起したらしく、

「これは間違ひもないことです。あのお輝さんといふお内儀は、堺の町で遊びあそ女めをして居た、照代といつた女でございます。二三年前フツと行方を晦くらましたが、堺の町で評判になつて居た頃は、遊佐の右太吉と深い仲で、照代が姿を隠したあと、右太吉は血眼になつて捜して居るといふ噂でございました。妙なところで、二人の顔を見掛けましたが、多分右太吉が通辭つうじをして居る頃小耳に挾んだ、歡喜天の額の夜光石に引かれ、その後をつけて、江戸まで來たに違ひありません」

堺の皆吉はさう言ふのです。

「有難う、それで大方わかりましたよ。明日は是非千二百兩の小判を、目黒へ持つて來て

下さい。頼みましたよ」

平次は千二百兩の念を押して、八五郎の後を追つて目黒へ飛びました。もう日が暮れかけて居ります。

目黒へ着いたのは、もう亥刻（十時）近い時分でした。庄司家の奥では、まだ、何やら揉め事がある様子です。暫らくすると、お勝手口が開いて、小風呂敷包みを持った、若い娘が一人、まだ薄寒い夜へ送り出され、それを追つて出たらしい伴の彌三郎は、父親の三郎兵衛の手で荒々しく引戻され、後ろの戸をピシヤリと締められてしまひました。

「お崎ぢやないか」

「あ、錢形の親分」

途方にくれた下女のお崎の前に、錢形平次は立つて居たのです。

「どうした、今頃外へ投げ出されて？」

「お嬢様と床を換へて寝て居るのを見付かりました。放つて置くと、今夜こそお嬢様の眼を潰されるに違ひありません。二日までは無事でしたが、三日目の晩、たうとう旦那様と御新造様に見付かつてしまひ、お前はどうぞこの家へは置かれな、とつと小田原へ歸れと外へ突き出されてしまひました。若旦那様と、お嬢様は庇つて下さつたけれど——」

「よし、よし、泣くな」

平次はお崎を撫めながら、近所の百姓家を起して、この娘のために一と晩の宿を頼みました。

それからが大變だつたのです。

下女のお崎を追ひ出されて、本人のお幾が、自分の床へ戻つてからざつと一刻、不安と焦躁せうさうのうちにも、若さと健康に負けて、お幾がウトウトとした時のことでした。

黒い影が——いや、その黒さも紛れる部屋まぎの闇の中へ、ソロリと忍び込んだ者がありました。手搜りてさぐと足搜りあしさぐで、漸く娘の床に近づくと、一氣に眼を襲はうとした様子でしたが、娘のお幾が足の方を枕に、枕の方を足にして、逆に寝て居るのに氣が付かなかつたものか、顔を搜つた手に足がさはつて、ハツと驚いた拍子、思はず何やら物に觸つた様子です。

曲者は氣を取直して、改めて頭を搜り出し、狙ねらひを定めて、身構へました。

ジーンと、鐵の燒ける匂ひ、曲者は闇の中に得物を振り冠りました。非常に落着いた、今度こそはの、寸毫すんがうも狂ひのない襲撃です。

「あッ」

その時、何處からともなく射した光線あかり、曲者の潜入した唐紙の間から、泥棒がんどう 龕燈あかりの灯

が、まともに曲者の顔を照して居るではありませんか。

それは何んと、長襦袢ながじゆばんを踏みはだけた寢亂れ姿、髪が少し亂れて、銀簪ぎんかんざしを振り冠かむりつた青い顔——藍あゐを塗つたやうな鬼畜きちくの顔——紛れもない、内儀のお輝の血ちに濁かわく、物凄ものぢい顔だつたのです。

泥棒龕燈どろぼうくわんとうを持つた男は、靜かに入つて來ると、黙つてその振り上げた腕を押へました。

「畜生ツ、岡つ引奴」

お輝の照代は、そのまゝ力が盡つきて、ヘタヘタと、碎かれた人形のやうに、娘お幾むすめの燃えるやうな茜あかね裏うらの布團ふだんの上に崩折くづれてしまひました。

その時、家の外では、八五郎の叱咤しつたが夜空に響いて高鳴ります。

「野郎ツ、神妙にしやがれ」

遊佐の右太吉が聖天堂の扉をコジ開けようとして居るのを見付けて、目黒中に響き渡る大捕物が始まつたのです。

×

×

×

翌あした日、堺さかひの町人皆吉が、千二百兩の大金を持つて來て、觀喜天くわんきてんを受取り、長崎奉行の手を経て、和蘭オランダ人に引渡されることになりました。

一度縁あつて江戸に入りましたが、もとの天竺のお寺に還した方が、八方圓く納まるに違ひないと、庄司三郎兵衛も千二百兩の大金を手に入れて満足したことでせう。

そして目黒に盛り場を作ることと断念し、伴彌三郎を家に入れて、下女のお崎と夫婦にしてやりました。内儀のお輝と遊佐の右太吉は夥しい舊惡が露見して、處刑されたことは言ふ迄ありません。

八五郎が訊くまでもなく、この事件にわからない點は一つもありません。たつた一つ、内儀のお輝の眼瞼まぶたの傷は右ではなくて左だったのは不思議で、一應自分で切つたのではないかと疑ひましたが、どんな女でも、自分の手で、自分の顔——わけても眼瞼を傷つける筈はないので、これは人に切られたものとわかり、よく突つ込んで訊くと、右太吉との嫉妬つとの争ひから、ヒ首あひくちで斬られた傷とわかりました。

最後に一つ、これは大事なことですが、お輝は聖天堂の鍵を、主人の持つて居るのと、一寸では見分けのつかぬやうな偽物を作り、曉方主人の枕もとに置いてある眞物の鍵とすり換へて歡喜天堂を開けたのです。

一度、その入れ換へた鍵を、戻す暇がなく海老錠えびぢやうに合はなくてひと騒ぎをしましたが、主人の手から受取つて爺やの與八に渡すとき、お輝は自分の持つて居る眞物と摺り變へた

のでした。

女體の額の夜光石がギヤマンの偽物だと、塚さかひの皆吉が言つたのは、平次に智慧をつけられた、皆吉がでつちあげた詭計トリツクでしたが、お蔭で女體の夜光石は無事に戻つたわけです。「だがね、親分。この間目黒へ行つて、庄司の家を覗いて見ましたが、下女のお崎はすっかり綺麗になつて、良い嫁になつて居ましたよ。ありや飛んだ掘り出しものでしたね。吉原の花魁おいらんを總仕舞にして選り出したつて、あんな良い娘はありませんよ」

「當り前だ、馬鹿野郎」

平次はさう言ひながらも、嬉しさうでした。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第三十四巻 江戸の夜光石」同光社

1954（昭和29）年10月25日発行

初出：「主婦と生活」

1954（昭和29）年

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

※「皆治」と「皆吉」の混在は、底本通りです。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

江戸の夜光石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>